

見えるもの、見えないもの ルカ24:1～12 / 李正雨師

今日、私たちに与えられた福音書の箇所は、ルカによる福音書が伝えてくれる復活の言葉です。先週の主日と水曜日、私たちは説教と聖書の分かち合いを通して、イエス様のエルサレムの入城について分かち合いました。特に水曜日の聖書の分かち合いの時間には、4つの福音書を比較しながら、各福音書の持っている特徴について話し合いました。一般に、共観福音書と呼ばれているマタイ、マルコ、ルカの福音書は、書かれている内容が似ています。マルコよりはマタイの福音書が、マタイよりはルカの福音書の方がもっと詳しく書かれています。それで、共観、共通の観点の福音書だということです。ところで、ヨハネによる福音書には、この三つの福音書に書かれていないことが書かれています。多分、すでに書かれた内容を再び書く必要はなかったからだと思います。しかしこのヨハネによる福音書も、イエス様のエルサレムの入城からは、共観福音書と様々な箇所が重なります。重なる理由は、イエス様の苦難と死、十字架と復活が、私たちキリスト教にとっては、最も大切なものだからです。今日は、この四つの福音書の中で、ルカによる福音書に書かれている復活の話をもって、皆様と御言葉を分かち合いたいと思います。

今日の福音書は、婦人たちが明け方早く、準備しておいた香料を持ってイエス様のお墓に行く話から始まります。この話は4つの福音書に書かれていますが、共通点が一つあります。それは、復活に關した初の人物が皆、女性であるということです。イエス様の遺体がお墓に入っていくまで、一緒にいた人も女性たちでした。それでは、12弟子たちは何をしていたのでしょうか。皮肉なことに12弟子は、皆、男性です。男性は何をしていたのでしょうか。ヨハネによると、イエス様が死ぬと、一部の弟子たちは、ユダヤ人を恐れ、自分たちがいる家の戸に鍵をかけていました。そして、残りの弟子たちは、元々の自分の仕事に戻っていました。その中の一人は、イエス様を裏切りました。やはり男性はだめですね。

イエス様の復活を迎えた初の人物がみんな女性だったということ。これには、意味があると思います。これは当時の女性たちの人権と関係がありますが、当時の女性たちは尊重されていませんでした。私たちの過去のことだけを思い出しても、過去の女性の人権は、男性に及ばないレベルでした。そしてユダヤの一部の地域では、必要によって、家の中の女性が売られることもあったそうです。そんなわけで、女性の言葉は、当然に証言としても認められませんでした。ところが、神様はこれを反対にお使いになりました。婦人たち、女性たちが復活の最初の証人になるようになさったのです。これは、当時の一般的な考え方をひっくり返すことでした。これについて、イザヤ書55章8節はこう語ります。「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると、主は言われる。」

このような神様の御旨は、イエス様の復活だけでなく、誕生の時にも現れました。イエス様の誕生を目撃した人は誰でしょうか。羊飼いと東から来た占星術者たちです。羊飼いは、社会的に低い職業の人々であり、東から来た占星術者もユダヤ人たちに無視されていた異邦人でした。しかし、神様はこのように人々にイエス様の誕生を知らせ、彼らによってメシアがこの世に来られたことを証言するようになさいました。このようなイエス様の誕生と復活の出来事は、神様が誰の神様なのか、どんな神様なのかを教えてくれることだと思います。つまり、私たちは復活の出来事を通して神様の御旨を見ることができるといえるのです。

福音書の本文に戻りましょう。婦人たちが明け方早く行って初めて見たのは、石が墓のわきに転がしてあったことでした。そして墓の中に入ると、イエス様の遺体が見当たりませんでした。彼らが見たのは、空の墓だったのです。空の墓を見た彼らは、途方に暮れていました。確かに見えるはずのイエス様の遺体が見えなかったからです。私たちもこういう時があるでしょう。確信していたことが崩れる時があります。そうな

ると、私たちの自信も、信念も揺れます。先に申し上げた12弟子たちの状況もそうだったと思います。彼らはイエス様がエルサレムを征服なさると確信していましたが、そのようになりませんでした。弟子たちが見たのは、十字架につけられたイエス様であり、それによって弟子たちは隠れたり、自分の職業に戻ったりしました。迷子のように、途方に暮れていたからです。今日の福音書の婦人たちも同様だったでしょう。婦人たちも十字架につけられたイエス様を見て、大きく失望しただろうと思います。しかし、婦人たちは香料も塗らず、葬られたイエス様のために、明け方早くお墓の前に来ましたが、空の墓以外には、何も見ることはできませんでした。

今の私たちにとっての空の墓は、復活の象徴になりましたが、当時には、遺体を盗まれることもあったので、婦人たちは大いに心配したと思います。自分たちの希望が殺され、盗まれたということは、彼らをもっと途方に暮れさせたでしょう。しかしこれは、すべての終わりではありませんでした。輝く衣を着た二人の人が婦人のそばに現れ、この二人は驚くべき話をします。5～6節の御言葉です。「婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。『なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。』」「死者の中から復活すること」、イエス様は十字架につけられる前、この話を何度も弟子たちに強く言われました。しかし、弟子たちはこの言葉を理解することができませんでした。当時のユダヤ人たちの霊的な世界では、復活というものは、神様が終末の時になさることであつたからです。さらにサドカイ派の人々は、この復活というものは信じていませんでした。ですから、イエス様は引き続き、弟子たちに復活のことを言われましたが、12弟子たちも他の弟子たちも分からなかったのです。

しかし、空の墓の前でこの話を聞いた婦人たちは、すべてのことを理解することができました。なぜイエス様の遺体が見えなかったのか、ガリラヤでの話がなんだったのかが分かりました。8節には「そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した」と書かれています。イエス様の復活の言葉が実現されたのです。婦人たちは墓から帰り、11人の弟子たちと他の人々に復活のことを知らせました。イエス様の復活のニュースが当時の無視されて、社会的弱者だった女性たちを通して証言されたのです。しかし、この話を信じなかった人々がいました。驚くべきことに、彼らは、使徒と呼ばれていた人々でした。11節の言葉です。「使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。」

使徒たちが信じなかったことには、いろいろな理由があるでしょう。常識的にも、霊的にも、復活ということはあり得ないことだと思ったかもしれません。それとも、イエス様が復活なさったら、当然自分たちの前に現れてくださるのだと思ったかもしれません。あるいは、この証言が女性たちの証言だったので信じなかった可能性もあるでしょう。しかし、イエス様はこのような固定観念を破って復活され、この世のすべての弟子たちの救い主になってくださいました。復活の力、復活の信仰ということはこういうことだと思います。すべての常識と理性、固定観念などを乗り越えること。この世では絶対に見ることができないこと。これが私たちの復活だと思います。

私は教会に来るとき、いつも聖望学園の方の道に歩いてきます。聖望学園の塀のそばには、先週には桜がとともきれいに咲いていて、今は青葉が出始めました。1、2ヶ月前も、木の枝には何も出ませんでした。天気は寒くて、桜がもう咲くとは思えませんでした。しかし4月になると、桜は満開となり、今は青葉が出てきました。まもなく青葉は、鳥の啼きになり、暑い夏に私たちの陰になってくれるでしょう。復活を信じるというのは、これと同じだと思います。今は目に見えませんが、もうすぐ花が咲き、葉っぱが出るということを信じるのです。そして神様は、復活を信じる者に救いを約束してくださいました。イエスは弟子の使徒トマスに、「見ないのに信じる人は幸いである」と言われました。見えない復活の信仰を大切にしてください。皆様になりますように。私たちの信仰に花が咲き、葉っぱが出ますように、主の御名によって祈ります。アーメン